
さようなら中野梓

スティーヴ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さようなら中野梓

【Nコード】

N8059X

【作者名】

ステイヴ

【あらすじ】

『ガキの使い』の名物企画『さようなら山崎邦正』を中野梓で書いてみました。

シリアスな場面もありますがこれはコントです。

もう1度言います、これは「コント」です！

漣「え〜．．．みなさん、こんばんわ」

唯律 絀「「こんばんわ」「」

漣「今日は．．．みなさんわかってはいると思いますが．．．悲しいお知らせがあります」

唯「はい．．．」

律「．．．」

絀「．．．」

漣「私達『放課後ティータイム』のギタリストであり．．．私達の後輩でもある中野梓さんが．．．この度バンドを脱退することになりました．．．」

律「はい．．．中野さんは．．．最初の頃もそのようなことを言うてはいましたが．．．まさか本当にこんな日が来るとはちょっと．．．」

唯「今まで楽しくやってきたのに．．．どうしてでしょうね．．．」
絀「何か重大な理由があるんですかねえ．．．」

漣「え〜ではここで．．．本日の主役である中野梓さんに登場して頂きましょう。どつぞこちらへ」

梓「どうも．．．」スタスタ

漣「中野さん．．．皆言っておられるんですけど．．．どうして．．．今回脱退を決めたのか．．．ちょっとすみませんが．．．」
梓「そうですね．．．まあ．．．色々あるんですけども．．．」
律「どうしたんですか．．．?」
梓「はい．．．実はわたし．．．」
唯「中野さん．．．言いたくないのであれば．．．」
紬「そうですね．．．無理をしなくても」
梓「いえっ．．．大丈夫です．．．すみません」

漣「では．．．すみませんが理由を．．．」

梓「はいっ．．．実は私．．．鈴木純さんとお付き合いをさせて貰ってるんです」

漣「．．．はい?」

律「あー．．．それはちょっと．．．初耳でしたね．．．」

唯「鈴木さんと言うのは．．．確か」

紬「同級生の方ですよね?」

梓「はい．．．そうです」

漣「ちょっと．．．驚いたんですけども．．．それがなぜ脱退の理由に．．．」

梓「はい．．．まあ色々あるんですけど．．．皆さん、鈴木さんが猫を飼っているのをご存知でしたか?」

律「猫．．．ですか?」

唯「私は知ってます」

紬「えーっと．．．確か名前は．．．」

梓「あずにゃん2号です」

漣「あの．．．ちなみに猫が登ってしまった木はどれぐらいの．．．」

梓「高さですか？」

漣「はい」

梓「2.5mです」

唯漣律絢「」「」「」「」「」「」

梓「．．．．．」

漣「ええ〜ではここで．．．中野さんとの思い出を振り返るということで．．．琴吹さんお願いします」

絢「はい、今回．．．え〜私達と中野さんの思い出の数々を再現アニメーションとして私が製作してきました」

律「アニメーションですか？」

絢「はい、ナレーションには唯さんの妹である平沢憂さんに協力して貰いました」

唯「妹がナレーションを？」

絢「はい、憂さんは中野さんの親友でもある方ですので」

梓「ありがとうございます．．．」

漣「では中野さんと私達の思い出BEST5です。ご覧くださいどうぞ」

『中野梓の思い出BEST5』 デデー

憂 『中野梓 17歳』

『HTTの新歓ライブに感動し軽音楽部に入部。その後、HTTのギタリストとなる』

『これまで学園祭やライブ、新歓イベントなど様々な場所で活躍し、HTTにとって無くてはならない存在となりました』

『そんな彼女が今日をもってHTTを脱退してしまいます』

『そこで、そんな彼女が残してくれた偉大なる軌跡の数々を今日は振り返ってみましょう』

憂 『第5位 中野梓 初登場』

『姉にとって後に可愛い後輩となるあなた・・・そんなあなたの初登場は可愛い中学生姿でしたね』

梓 『あ・・・あった』

『あれ何・・・？』

『あの〜．．．入部希望なんですけど．．．』
律『確保おー！ー！ー！ー！ー！』
梓『きゃああああああ！ー！』

憂『第4位 日焼けした中野梓』

『あなたが加わってからは初めての強化合宿．．．しっかりと練習
したいあなたでしたが．．．結局遊びまくっちゃいましたね』

梓『ちゃんと練習出来るのかなあ．．．』プクー

唯『あずにゃんも遊ぼうよー！』

梓『結構です！』

律『あれ〜もしかしてスポーツ苦手な人〜？』

梓『なあ！？そんなことありません！やってやるです！ー！』

梓 アハハハハハ

梓『やっぱり遊ばずに先に練習したほうがよかったんじゃないです
か！？』

律『梓が1番遊んでたじゃん．．．真っ黒になって』

梓『私はちゃんと練習もするもん！』

律『じゃあ一晩中！？』ケラケラ

梓『するもん！ー！』

憂『第3位 中野梓 号泣&ブチギレ』

『けいおん部に入ったものだらけてばかりの先輩達と顧問．．．
そんな状況にある時は大泣きし．．．ある時は怒っちゃいました
ね．．．』

梓『（もしかして私の自主性が試されてるのかなあ．．．よしっ！）

「ジーーーーー ジャーン

さわこ『うるさあーーーーい!』

梓『ひええ! ああ．．．グスツ．．．うう』

漣『ごめんな．．．あの先生ちよつと変なの』

梓『こんなんじゃダメですーーーー!!』 ドカーン

『みなさんやる気が感じられないです!』

『ティーセットは全部撤去するべきです!』

律『まあまあとにかく落ち着いて．．．』

梓『これが落ち着いていられますか!』

唯『いい子いい子』 ナデナデ

漣『そんなことで治まるはず．．．』

梓『はあ．．．/ /』 ポケー

漣『治まった．．．』

憂『第2位 中野梓 子猫を預かる』

『今は恋人である鈴木純さんから子猫を預かったあなた．．．そ
して勝手に名前までつけちゃいましたね．．．』

純『お願い! 今度の土日、うちの猫預かってくれないかなあ?』

梓『えっ!?!?でも猫飼ったことないし．．．』

純『そつかあ．．．』ハア
梓『でも他に頼る人いないなら．．．』

梓『あつ．．．遊ぶ!?!?』

猫『ニヤツ』

梓『ひいひい．．．』

猫『ニヤア〜ン』

梓『にゃ〜ん．．．あずにゃん2号．．．』

あずにゃん2号『ケヘッ．．．カアア』

梓『あずにゃん2号?どうしたのあずにゃん2号!?!?』オロオロ

唯『もう大丈夫だよ』

梓『すいません．．．猫が毛玉吐くなんて知らなくて．．．』

憂『第1位 ネコミミ中野梓』

『山中先生に無理矢理付けられたネコミミ．．．でも本人は満更
でもありませんでしたね．．．』

さわこ『梓ちゃんにプレゼントがあるの パンパカパーン』

梓『あの．．．これなんですか?』

さわこ『何ってネコミミだけど?』

梓『うう．．．』カパッ

唯『梓ちゃん可愛い〜』ガバッ

律『にゃあって言ってみて!』

梓『にゃあ．．．』

唯律細さわ『あはははは／＼』キュルルリーン

梓『はっ！つい．．．』

唯『あだ名はあずにゃんで決定だね！』

憂『H T Tのメンバーとして短い間でしたが．．．皆と共に大きく成長した中野さん．．．』

『あなたもその輝ける歴史にピリオドを打つ時が来たのですね．．．』

『でも．．．共に過ごした歳月は決して色褪せることなく私達の心のアルバムに飾られるはず．．．』

『そう．．．永遠に．．．』

『さようなら．．．そして．．．思い出をありがとう』

漣「さあ．．．これでアニメの方は終了なんですけれども．．．中野さんどう思われましたか？」

梓「はい．．．凄く嬉しいです．．．琴吹先輩ありがとうございました」

紬「はい．．．どういたしまして」

漣「え〜ここで．．．私達以外の中野さんと親交のある方からのメッセージビデオがあります。ではご覧くださいどうぞ」

和「中野さんこんにちは、真鍋和です」

「え〜この度はH T Tを脱退すると聞いて正直．．．まあびっくりしていると言えは嘘になりますけど．．．」

「私は中野さん以外のH T Tのメンバーとは同級生で同じクラスですが．．．」

「中野さんとは．．．正直．．．接点がありませんでしたよな気がします」

「あなたに関する思い出っていうものが．．．私の中には全くと言っていいほどありません」

「まあ．．．私にとってあなたが辞めようが辞めまいが正直どうでもいいことです」

「まあでも．．．H T Tのメンバーとして頑張ってきたことは事実ですので．．．あの〜」

「まあお疲れ様でした、ありがとうございました」

梓「……………」

漣「えゝ以上が真鍋さんからのメッセージでした」

梓「……………」ジトー

漣「プツ…ゴホツえゝでは次に顧問である山中さわこ先生からのお別れの挨拶と花束贈呈です。山中先生お願いします」

さわこ「えゝ…梓ちゃん、短い間でしたがありがとうございました」

梓「ありがとうございました」

さわこ「あのゝ梓ちゃんは本当に真面目な生徒で…最初の頃はティータイムを止めようと何度も言ってきました…」

「まあ確かに梓ちゃんの言うことも分かるんですけど…」

「正直…嫌なヤツが来たなあと思いました」

梓「……………」

漣「プツ…」

律「ククク」

唯「クヒヒヒ」

紬「フフフフ…」

さわこ「少しは空気読めよと…何度も言いたかったのですが…

・教師と言つ立場ゆえ言つことが出来ませんでした．．．」

「そのくせネコミミを全然つけようとしないし．．．なんてノリの悪い子なんだろうと正直思いました」

「少しギターが上手いからって何様のつもりなんだと．．．」

「唯ちゃんならリズムギターもリードギターも出来るし．．．ライブの時はピンチヒッターで私が出るから．．．」

「その．．．本当に辞めてくれないかなあといつもいつも思っていました」

梓「グスツ．．．」

漣「プクククク」

律「ヒヒヒヒヒ」

さわこ「でも今回脱退するということ聞いて．．．初めてあなたを褒めてやろうと思いました」

「桜ヶ丘高校軽音楽部をこれから心の拠り所としていくには．．．まあ腐ったミカンはずぐに排除するべきです」

唯「ククツククク」

紬「ウヒヒヒヒ」

さわこ「今までお疲れ様でした」ガサガサ

梓「ありがとうございまして．．．」スツ

さわこ「．．．」スタスタスタ

梓「．．．」

漣「では我々からも一言ずつということでは．．．まずは平沢さんと琴吹さん、お願いします」

唯絀「はい」

唯「えーっと．．．今回中野さんが辞められるということなんですけど．．．」

「まあプライベートでも何回かは．．．会っ．．．たんかなあ？」

「その．．．いつもいつも私は中野さんのことをあずにゃん、あずにゃん呼んでただけど．．．」

「まあ．．．自分であだ名つけてあれなんですけど．．．まあ．．．正直．．．痛いなあって今では思う」

「高校生にもなつてあずにゃんはないだろと思いつつも．．．その〜自分でつけた責任もあるし．．．」

「今更別のあだ名付けんのも．．．正直面倒くさいし．．．まあそれで中野さんのことをずっとあずにゃんって呼んでたわけで」

「本人は気に入ったのかもしれないけど．．．まあ猫にあずにゃん2号って名前付けてるから気に入ったのかもわからんけど．．．」

「まあ．．．正直痛いです」

「でも今回HTTを脱退することになつても．．．付き合い自体は．．．まあ続けていっても私はいいいから．．．」

「その〜本当に．．．まあ．．．お疲れ様でした」ガサガサ

梓「．．．．．」ジト

漣「では琴吹さん．．．」

絀「あっはい」

絀「え〜．．．正直、あなたに関する思い出があまり覚えていませ

ん

「再現アニメは作れって言われて作っただけですので．．．」

「正直．．．何も言うことがありません。お疲れ様でした」ガサガサ

梓「．．．．．」ギロツ

漣「え〜では私達からも一言ずつですので．．．田井中さん」
律「はい」

漣「ん〜．．．本当にあなたとは現場でしか会わなかったので．．．」

「部活以外でのあなたとの思い出が出てというのが．．．」

「ごめんなさい、全く無いので．．．琴吹さん同様ちょっとコメントの仕様がなくて．．．」

「えーっと．．．本当に思い出がないってのに正直驚いてます」

「まあこれからも元気で．．．お疲れ様でした」ガサガサ

梓「．．．．．」プルプル

律「あつ最後に私からなんですけれども．．．」

「え〜部活以外でも多分あなたとは．．．あつ憂ちゃんと一緒にいた時ハンバーガー屋で会いました．．．」

「まあ．．．随分と舐められた事を言われて．．．」

「その時から．．．私達が焼きの材料だとすると．．．私が野菜、秋山さんが出汁、平沢さんが肉、琴吹さんが卵で．．．」

「あなたはアクです」

梓「．．．．．」

「まあ．．．そんなポジションだと．．．今まで考えてきました」
「これからも世間の皆様の邪魔をしない程度のあくとして頑張っ
て下さい」

「お疲れ様でした」ガサガサ

梓「．．．．．」ジトー

透「え〜では最後に．．．中野さんから一言頂くといいことで、中
野さんお願いします」

梓「グスツ．．．こ．．．こんなつ．．．いっぱい．．．花束に．．
．ヒック囲まれると．．．誰が思いますかあ．．．」

「グヒユウ．．．ププウ．．．みつ．．．短いあつ．．．間でした
が．．．ズズー．．．ほっほかご．．．テータイムの．．．」

「ヒック．．．ぎ．．．ぎ、ギタリスト．．．とひて．．．いつ
いつ．．．イママデ．．．グヒー．．．いままで．．．」

「か．．．かず．．．数々の．．．ズズー．．．ぶ、ぼたい．．．
舞台上に．．．た．．．たらせて．．．いららいい．．．」

漣「ク．．．フフフフ」
律「キヒヒヒヒ」

梓「ほ．．．ほんとうに．．．ズビー．．．か、か、か．．．がんじ
や．．．じではず．．．」

「フゴツフゴツ．．．グフヒユウ．．．ほ、ほかごてー．．．て
てテータムの．．．み、皆さんは．．．ズズー」

「ハツハツハツハツ．．．グジュー．．．いいひと．．．グズツ．．
．．．いいひとばかりでえ．．．ズビー」

唯「ムフフフフ」
紬「カヒヒヒ」

梓「ぜ．．．ぜっかく．．．フーフーフー．．．せ、先輩って．．
よ．．．よんべるようになったのに．．．ヒツク」

「こ．．．こ．．．こ．．．こんな．．．ガバババ．．．ギヒイ．
．．．ブシュー．．．さ、さ、い」．．．になる．．．だんで．．．」

「ウアアアア．．．アア．．．アアアアアア．．．ほ．．．ほ
ん．．．ざん．．．げで．．．グシュー」

「ブヒイ．．．ほっ．．．ほかごてーたいむの唯さんはあ．．
唯．．．ざんばあ．．．」

漣「グヒヤヒヤヒヤ」
唯「ププウ」

梓「唯．．．ゆ、ゆいざんはあ．．．ブシヨワー．．．じ、じんど．
．．．ぐぐぐぐれー．．．ぐペーぶやにい．．．」

「ぐ、ぐ、ぐ．．．ズシュー．．．わっわたひをお．．．さそ．．
．誘って．．．ズズー．．．ガアアアア」

「グフウ．．．うあ．．．うい．．．ひゃんろお．．．い、い、い、
いっひよりい．．．ブフー」

「ぐ．．．ぐ、ぐ、グレーフを．．．だん．．．ブフヒュウ．．．
だべよっでえ．．．言って．．．ズズー」

「あっあっあっ．．．アアアアア．．．ヴァアアアアアア
アアアアアアアアアアアア」

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアア」

漣「アヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ」

律「ブヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ」

唯「グハハハハハハハハハ」

紬「ブフフフフフフフフフフフ」

梓「あああああああああああやめだくだいよお．．．ヴァア
ア私やめだくだいよおおおおおおお」

唯「中野さん落ち着いて！」

紬「平沢さんそっちの足を持って！」

律「お前から言ったんじゃないか！」

漣「もう連れ出せ！」

梓「いやじゃあああああああ！わらひは「ご」をつ「ご」かなあー！
ーいー！」

唯絢「「せーのっ！」」

梓「やじゃあああああああ．．．ズルズルズルズル

漣「ええ〜．．．以上で中野梓さんは．．．正式にH T Tを脱退し
たということ．．．」

律「いやぁ最後は壮絶でしたねえ」

唯「あんな中野さん見たのは初めてです」

絢「なんで最後嫌がってたんですかねえ．．．」

漣「ちよつとわかりませんねえ．．．」

律「まあ．．．今まで我慢してたものが一気に溢れ出したんですか
ね」

唯「いやあ〜．．．凄かった」

絢「はあ〜でも．．．終わってたんですねえ．．．」

漣「では．．．私達も帰りましょうか」

律「そうですね．．．あつごはん食べに行きませんか？」

唯「あつごいいですね〜」

絢「行きましょ行きましょ」

「でも安心してください あずにゃんは『放課後ティータイム』をやめへんで〜〜〜!」

透律唯紬「……」

梓「じゅーーん!?!」

純「ども〜」スタスタスタ

梓「では聞いてください!私と純が奏でる『ふわふわ時間』です!」

ふわふわ時間〜あずにゃんやめへんでバーション〜

梓『キミを見てるといつもハートDOKI DOKI』

『揺れる思いはマシユマロみたいにふわ ふわ』

『いつもがんばる 純(いつもがんばる)キミの横顔 純(キミの横顔)』

『ずっと見ても 気付かないよね』

『夢の中なら 純（夢の中なら） 二人の距離縮められるのに
なあ』

梓『ああ あずにゃんやめへん 絶対にやめへん 放課後ティータ
イム やめへん』

『お気に入りのウサちゃん抱いて 今夜もオヤスミ』

梓『やめへんで〜純）やめへんで〜（ やめへんで〜純）やめへん
で〜（ やめへんで〜純）やめへんで〜（』

終幕

透律唯紬「」「」「」「」「」「」

透「はあ〜・・・じじりするっ」

律「ああいうのを悪ふざけって言うんだなあ・・・」

唯「あずにゃんは成功してると思ってるのかなあ？」

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8059x/>

さようなら中野梓

2011年10月22日02時22分発行